

ホイットィア70歳祝賀スピーチ事件を どう見るか

——『マーク・トゥェイン自伝』における著者晩年の批評精神——

Mark Twain's Speech at Whittier's 70th Birthday Celebration:
How Does Twain Revisit the Speech in His *Autobiography*?

井 川 眞 砂

要 旨

今や自身も70歳を迎えたマーク・トゥェインは、1906年1月、読者からの1通の手紙に触発され、封印していた28年前のホイットィア70歳祝賀スピーチ事件を振り返る。当時大きな衝撃をもたらしたその事件とは、ラルフ・W・エマソン、ヘンリー・W・ロングフェロー、オリヴァー・W・ホームズといった高名な詩人の名を騙る、3人の詐欺師を戯画化した彼のスピーチがアメリカ文学の権威を冒涇したと見做された出来事を指す。不明な部分がなお残るこの事件にあらためて向き合い、彼はみずから吟味する。

その結果、スピーチ原稿そのものは「才気煥発で、ユーモアたっぷり」の「申し分ない出来であり」、「無作法あるいは粗野」にはあたらず、そこに落ち度があるとは思えないことを確認する。つまり、当時なおも君臨したボストン中心の東部文学世界に、「揺さぶり」をかけた自身の西部的姿勢を是とする判断である。トゥェイン本来のこの立ち位置こそが、おのれの作家人生を振り返る『マーク・トゥェイン自伝』の批評精神と言えらるだろう。

近年、本事件の見直しが進められており、トゥェインという作家個人の側面にとどまらず、アメリカ文学・文化史の側面から、彼のスピーチが何を示唆するのかを問う議論がなされている。

キーワード

19-20世紀転換期アメリカ、マーク・トゥェイン、『マーク・トゥェイン自伝』、ホイットィア70歳祝賀スピーチ事件、ボストン中心の東部文学世界、文化ヒエラルキー、ハイブラウ／ロウブラウ、アメリカ文学・文化史

I. ホイッティア70歳祝賀スピーチ事件（1877年）の見直し

——バーナード・デヴォートからヘンリー・N・スミス、そして
ジェームズ・E・キャロンへ

1906年1月初頭、トウェインが読者からの1通の手紙（1月3日付）に触発されてスピーチ事件を振り返るのは、『マーク・トウェイン自伝』¹⁾の口述筆記が本格的に始まるまさにその時期のことである。口述開始後すぐに『自伝』のトピックに選ぶこの事件は、おのれの作家人生を振り返ろうとする「今」、「自分の人生におけるあの奇妙な出来事」（260）を避けては通れぬと考えたからだろう。

ローラ・K・ハドソン夫人の手紙²⁾は、トウェインの「好奇心」（264）を掻き立てるものだった。かれこれ20年ほども昔、新聞に載った彼のスピーチが最高に面白かったのでまた読みたいと思いつつ探しているが、どうしても見つからない³⁾。そのタイトルと所収本をご教示願えまいかと乞い、スピーチの内容は「山小屋に住むある鉦夫についての話です」（260）と続ける。その小屋に3人の男が一晚の宿と食事を求めてやって来ます。鉦夫が語る可笑しな話の中でもいちばん可笑しいところは、鉦夫が「とて^てもぶ^ぶっきらぼうに、しかし気の利いた」（260）質問をするのに対し、3人は「空想的で大げさな」（260）言葉で、可笑しな応答をするところですが、つまり、鉦夫が使う具象的な口語文と詩人が使う抽象的な文語文との乖離の可笑しさを語り、記憶に残る勘所を夫人は伝えるのである。山小屋で十分快適に暮らす鉦夫に、「偽^{にせ}ホームズ」は「さらに荘厳なる館を築け／おお、魂よ！」などと詠じるものですから、「鉦夫は激怒して立ち上がり、3人を追い出すのです」（260）と夫人は説明する。間違いなくこの話は、あのスピーチ原稿そのものだ⁴⁾と彼が察知するのは言うまでもなからう。「夫人がそのスピーチは愉快であると言ってくれたとき、もしかしたらこの人が言っ

ていることは正しいかもしれないと私は考えた」(264)と、何よりも夫人がユーモアを聴き取ってくれたことを彼は喜ぶ。夫人への返信にもそれが記されている。

その事件後1年か2年は、それについて考えることにも耐えられませんでした。私の苦悩と恥ずかしさはとても激しかったので、愚かだったという感覚となって確定してしまい、その出来事はすっかり私の頭から離れました——だからこの28年か29年の間ずっと、当時の私のスピーチは不作法で粗野であり、ユーモアを欠いていると確信して過ごしてきました。しかしあなたとあなたのご家族は28年前にそこにユーモアを見出されたというではありませんか。私はこの問題を調べてみようという気になりました。だからボストンのタイプストに過去のボストンの新聞を探し出し、そのコピーを送ってくれるよう依頼しました。

それが今朝届きました。そこに何らかの粗野な点があるとしても、私には見つけられません。もしそこに無邪気でかつ途方もなく笑わせるものがないなら、私には批評眼がないことになります。(260-261, 1906年1月11日付返信)

夫人の手紙はトウェインを鼓舞した。一方、私たち読者はその手紙によって夫人がトウェインのスピーチをどこでどのように楽しんだかを知ることになる。子どもたちがまだ幼かったころ、いつものようにある夕べ、夫が朗読する雑誌や本に耳を傾け、針仕事をしながらそれを聴いたという。そのときの話が忘れられない。ラジオもテレビもない1870年代末、ボストンで披露したトウェインのスピーチ全文が(その翌日の新聞で)アメリカ東部ニューヨークの読者に伝えられ、夫人はそれを楽しんだ。子どもたちは今や大きくなり、一家でトウェイン作品を読んでいるという。

トウェインのつぎにこの事件を振り返るのはもう1人の当事者、彼の友人ウィリアム・ディーン・ハウエルズであり、トウェイン没年の1910年、『マーク・トウェインを語る——回想と批評』(*My Mark Twain: Reminiscences and Criticism*)の中で言及する。もっとも彼自身はホイットティア70歳祝賀会の主催者『アトランティック・マンスリー』誌(以下、『アトランティック』と略記)の編集長かつ当日の司会者であるため、言わば雑誌社側の文化的立場に立つ責任者であった。そのためか、トウェインのスピーチを誤解してしまうのである。トウェインはスピーチで詩人本人と虚構の登場人物(詐欺師)とを明確に区別している(H. N. Smith 168, Caron 434)のだが、聴衆の中には(ハウエルズを含めて)3詩人本人の人格を貶したと誤解する者もいた。そして実際、ハウエルズのその誤解による、ないしは「過剰反応」(Scharnhorst 234)による「哀れなクレメンズの大失態」(qtd. in H. N. Smith 162)という烙印によって、この事件は引き起こされた観がある。「もし私が彼らの立場だったら、私自身、よい気はしなかつただろうとの思いが残るばかりだ」(54)と上記回想録でも表明しており、ハウエルズによる「大失態」の烙印はこの事件にとって決定的だったと受けとめざるを得ないだろう。

しかし1932年、バーナード・デヴォートはその烙印を見直す必要性を指摘する。その烙印による評価は当時のボストンの新聞報道とは必ずしも一致するものではない、と彼の著書『マーク・トウェインのアメリカ』で主張する(204)のである。その後1955年、この問題を追跡したヘンリー・N・スミスは、その超大な労作のタイトルをハウエルズの言葉から借用した「『哀れなクレメンズの失態』」(“*That Hideous Mistake of Poor Clemens's*”)の中で多くの貴重な成果を挙げた。ハーバード大学ホートン図書館所蔵ホイットティア70歳祝賀関連未公開資料(出席者署名入り座席表を含む)の発掘や、イエール大学バイネック図書館所蔵トウェインの手書きスピーチ原稿を許可を得てタイプスクリプトにした全文の公開、3詩人へのトウェインの手

書き詫び状と3者からの各返信の全文公開、当時の新聞記事（の広域にわたる）涉獵等々によって、数多の謎が解き明かされた。たとえば会場で彼の「スピーチを聴いた人びとの多くが笑った」（155）ことや、そのスピーチに「明らかに不届きだと言えるものは何もなかった」（155）こと、さらにはそのスピーチの意義をスマスが考察したこと等、重要な見直しとなった。それでもなおスマスの議論に曖昧さが残る点は否めないのだが、以後、大勢の研究者がこの事件の見直しに取り組んで来た。

近年、トウエインという作家個人の側面にとどまらず、アメリカ文学・文化史の側面からこのスピーチ事件の議論が展開されている。トウエインのスピーチは「アメリカ文化にとって何を示唆するのか」（433）を問うジェームズ・E・キャロンは、2010年、やはり超大な労作「道化を演じる諷刺家——ホイットィア誕生祝賀会におけるマーク・トウエインのパフォーマンス」（“The Satirist Who Clowns: Mark Twain's Performance at the Whittier Birthday Celebration”）において、1877年のトウエインのスピーチは「アメリカ文化の危機が何であったか」（434）を示す点を論じる。こうしてトウエイン自身に始まる事件の見直しは、デヴォート、H・N・スマスを経てキャロンらへと続くのである。

本稿では、カリフォルニア大学出版『マーク・トウエイン自伝』全3巻（2010-2015年、トウエインの意向に沿い没後100年に出版）ならびにオックスフォード大学出版『我が自伝からの抜粋』（1996年、トウエイン生前の雑誌連載版復刻）に基づき検討する。このスピーチ事件を晩年のトウエインはどう見たか、すなわち事件をめぐる自己評価はいかなるものであり、またそれをいかなるレトリックで表現したかについて考察を加えたい。

II. ^{リテラリー・フェローズ}〈文芸家たち〉が列席した『アトランティック』の晩餐会 ——ホイットィア70歳と『アトランティック』20歳

『アトランティック』主催のジョン・グリーンリーフ・ホイットィア70歳祝賀晩餐会は、1877年12月17日、彼の誕生日にボストン屈指のホテル・ブランドウィックにて開催された。新聞の見出しはもっぱらホイットィアの祝賀を伝えるが、主催者であるヘンリー・O・ホートンの挨拶の通り「この集いの目的は『アトランティック』が20歳の誕生日を迎えたことを祝う」とともに「我らが敬愛する賓客の70歳の誕生日をお祝いする」ことである。トウエインのスピーチは他のスピーチと同様にディナー後の祝賀行事において、ホイットィアを祝う詩の朗読や『アトランティック』を言祝ぐスピーチが連続する中で披露された。ただし、彼のスピーチにホイットィアへの具体的な祝辞はない。『アトランティック』を祝う明確な言葉も特にない。いったい彼は、何を言わんとしたのか？ それをよりよく理解するために、当日のパフォーマンス現場の状況も含め、晩餐会の概要を翌朝の新聞報道『ザ・ボストン・デーリー・グローブ』紙（1877年12月18日⁴⁾、以下『ボストン・グローブ』と略記）を中心に参照し（必要に応じて他紙にも言及して）幾分立ち入り、見ておこうと思う。それというのも、トウエインのスピーチが会場でいかに受けとめられたかについて、『自伝』中での叙述と新聞報道との間には大きな乖離があるし、彼のスピーチをどう読むかについても大いに議論がなされて来たからである。

スピーチ会場はボストンでも指折りの豪華ホテルであり、「赤レンガと砂岩造りの100万ドルの宮殿」（DeMarco 98）である。トウエインがスピーチの中で語るネヴァダ山中のちっぽけな山小屋とは雲泥の差があり、譬えようもない。彼のパフォーマンスの現場は、あらゆる点でスピーチ内の世界とかけ離れている。晩餐会場となるホテル新館大食堂は華やかなお祝いの



図1 ホイットニア70歳祝賀晩餐会（ホテル・ブランズウィック新館大食堂）出席者の署名入り座席表

※サミュエル・L・クレメンズ（Mark Twain）の座席と彼の署名は上座に向かって左手外側，上から9席目。

出所） Courtesy of the Houghton Library, Harvard University.

装いであり、壁にはイングリッシュ・アイビーのリースで囲ったホイット
ティアの肖像画とエイムズベリー邸の油絵が掛けられ、テーブルには美しい
花が飾られた。ついでながら、晩餐会のメニュー一覧からは白ワインや赤
ワイン、オイスターや魚に、チキンやマトンやビーフ、サラダやスープ、
糖菓子やフルーツなどなどが目に入るが、これだって豪華すぎて鮎夫の山
小屋の「お定まりのベーコンと豆、ブラックコーヒーに熱いウイスキー」
(261)とは比べようがない。何もかもが違うのだ。この差異を意識しなが
ら、晩餐会場でのトウエインの思いを、私は想像してみたくなる。

「出席者の署名入り座席表」(参照：図1)⁵⁾の通り、上座の主賓席には向
かって左からヘンリー・W・ロングフェロー、ラルフ・W・エマソン、ジョ
ン・G・ホイットティア(主賓)、ヘンリー・O・ホートン(主催者)、ウィリア
ム・D・ハウエルズ(司会者・『アトランティック』編集長)、そしてオリヴァ
ー・W・ホームズの6氏の席が設けられ、主催者側の2人を合わせて58人
が集った。「皆が大いに驚きまた喜んだことには、ホイットティア氏本人の臨
席が得られた」(*Boston Globe*)のだった。ゲストは全員『アトランティック』
への寄稿者たち(ホイットティアは創刊号の寄稿者の1人)であり、チャールズ・
D・ウォーナー、チャールズ・E・ノートン、トマス・W・ヒギンソン、R・
H・ストダード、D・A・ゴダード、エドワード・アボット、ジェームズ・
R・オズグッド、サミュエル・L・クレメンズ、W・H・ビショップ、シルヴ
ェスター・バクスター、プロフェッサー・グリーン [=ジョン・フィスク]
他である。座席表によれば、サミュエル・L・クレメンズ(マーク・トウエイ
ン)の席は上座に向かって左手外側、上座から9席目である。さらに座席
表をよくよく見ていけば、女性作家たち、たとえばハリエット・B・ストウ
やローズ・T・クック、レベッカ・H・デーヴィス、ルイザ・M・オルコッ
トなど『アトランティック』への寄稿者たちが1人もいないことに気づく
だろう。主催者によるこの女性作家たちの不当排除について論評する新聞

があることに、ジェームズ・E・キャロンが言及するのはもっともなことである⁶⁾。

会場の厳粛な雰囲気についても一言触れておかねばなるまい。ホイットィア、エマソン、ロングフェローたち主賓席のゲストが入場すると「敬うような、ほとんど神聖な雰囲気 “a reverend, almost holy, air”」がその場に漂ったと『ポストン・デーリー・アドヴァタイザー』紙 (qtd. in H. N. Smith 172) は報じる。来賓が入場すると会場が多少緊張するといったこと自体は珍しくないが、「敬うような、ほとんど神聖な雰囲気」が醸し出されたとなると、やはり一般的とは言えないだろう。しかし、さもありなんとこの報道を受けとめるH・N・スミスは「こうした詩人たちは、ありふれた、むさくるしい現実よりもずっと高いところの理想の王国の人たちだと見做されていた」(Ibid.) と論評する。そしてレベッカ・H・デーヴィスの若いときの体験を引き合いに出し、エマソンが近づいたとき畏敬の念で身体がこわばったという彼女の言葉を伝えるのである。それはウエスト・ヴァージニアの奥地から彼女が初めてニューイングランドを訪ねたときの体験だという。トウエインもまた、この晩餐会を回想する『自伝』の中で、「あの畏れおおい、神のごとく崇拜される人たち」(266) が醸し出す厳粛さを無視できずにいる。スピーチ原稿では使用しないこの種の語句 “those awful deities” (266) を、本事件を振り返る『自伝』の中では一度ならず使うのである。「神聖な」空気を意識せざるをえぬこの会場で、スピーチ原稿の暗記に勤んでいただろうトウエインの姿が浮かんで来そうである。晩餐会は7時ころに始まり、ディナー後の行事は10時10分に開始した。

ディナー後の冒頭挨拶で、ホートンは出版人の立場から『アトランティック』創刊以来の20年の歴史を振り返り、その実績を誇るとともに草創期からの寄稿者に感謝し、今回招待した若手寄稿者にその未来への期待を込めて語りかける。もちろん、初代(ジェームズ・R・ローウェル)、2代(ジェ

ームズ・T・フィールズ), そして3代(ウィリアム・D・ハウエルズ)の各編集長への感謝も忘れない。

『アトランティック』はこの1月号で21年目に入ります。本誌は、1857年の経済危機の時期に歩み始めました。そして若いアメリカにありがちな浮沈を経験し、いま未来の可能性に胸膨らませています。(中略) 創刊以来の年月の諸々の変化の間も、ずっと我が国の文学、科学、芸術、政治における一流の雑誌としての高邁な理想に誠実に取り組んできました。『アトランティック』はその生来の傾向や伝統において完全にニューイングランドの雑誌である一方、偉大な名前の元となったアトランティック・オーシャン大西洋同様に、アメリカ文学への影響力において広大で力強いのであります。(中略) ニューイングランドから移住する人びとの波は続いており、その後を追うようにして本誌の発行部数は拡大しています。人びとは移住し、大いなる西部と南西部に、またシエラ・ネヴァダ山脈を越えた地に住むようになりました。そして移住地に寄せる波は何人かの若くて極めて有望な作家を、引き潮とともに我われのところへ連れ戻してもくれました。(中略) 『アトランティック』は創刊されてからまだごく短い20年にしかすぎませんが、かなりの進歩をなしたのです⁷⁾。(Boston Globe)

ホートンの挨拶に耳を傾けながらゲストたちは『アトランティック』創刊以来の歴史を振り返ったことだろう。トウエインも『アトランティック』の〈いまとこれから〉に思いを馳せていたかもしれない。

スピーチの最後にホートンが、ホイットニアを紹介すべくその名を発声するや、全参加者は立ち上がり拍手した。ホイットニアも立ち上が

ったが拍手は鳴り止みそうになかった。すると再び拍手が上がり、それが静まると彼は幾分当惑し、ゆっくりとこう言った。「みなさんは今宵わたしがスピーチをするとは思っておられないでしょう。私は『アトランティック』の友人のみなさんにお会いできて大変嬉しいです。多くの方々はその著作を通して存じ上げるだけなのですが、私のために祝いの会を開いてくださり、みなさんにお礼を申します（拍手）。私が出席できない場合を考えて、必要なときに朗読してもらえよう、友人のロングフェローに短い詩を手渡してあります（拍手）。読んでくれると思います（拍手）。私の声はもともとおどおどしているものですから、めったに聞き取れません。親切にもロングフェローが朗読してくれます。」(Boston Globe)

ロングフェローがホイットィアの新作を朗読し、深い静寂の中でみなが耳を傾ける。その厳かな詩歌朗詠の現場こそ、トウエインが予定しているスピーチのあの山小屋の詩句暗唱場面のまさに〈厳粛版〉世界ではないのか。このとき彼はその〈戯画版〉を想起していたのではあるまいか。詩の朗読が終わると長い大きな拍手が起こり、ついで司会のハウエルズがエマソンを紹介。エマソンはホイットィアの詩「イカボッド」を朗読する。その後、ハウエルズやノートンがスピーチし、つぎに欠席者からの手紙の紹介が終わると、ハウエルズに紹介されてトウエイン自身のスピーチの番になる。その後にはストダードが、正義のために戦ったクエーカー詩人ホイットィアへのオマージュを作詩・朗読する他、ウォーナーがスピーチを、さらにずっと後に、ヒギンソンがホイットィアの面白い逸話を語る。

こうして続くディナー後の第2部行事で注目すべきは、『アトランティック』20周年の祝賀に軸足を置いたスピーチであろう。ノートンは『アトランティック』がアメリカの最高位の雑誌の地位を得たのは、間違いなく初

代編集長ローウェルの包括的な支援と幅広い学識のおかげであります」(Ibid.)と述べてローウェルを讃え、スペイン駐在アメリカ公使としてマドリッドに赴任中の彼がこの場にいないのは残念です、と言った。ウォーナーは『アトランティック』の創刊は正真正銘の文学運動を表明するものでした。その運動は興味深いものです。と言うのもそれは、わが国の歴史の中で最も実り多いものだからです」(Ibid.)と述べ、エマソンやローウェルがアメリカ文学ならびに批評の発展に寄与して来たことに言及した。そして「私がもう一点指摘したいのは『アトランティック』が創刊されてからというもの、アメリカの作家がイギリス側の批評に脅えることからほぼ解放されたか、自立したことです。かつて過ごした日々には比べれば、アメリカの作家は今やロンドンで何と言われようがほとんど気になりません。こうした見方は事実として広く認められています」(Ibid.)、と。そしてスピーチの締め括りに、ウォーナーは簡潔で雄弁なホイットィアへの賛辞を述べ、拍手を浴びた。

トウェインのスピーチもどちらかと言えば『アトランティック』20周年に比重を置くものになるのだろうが、それへの祝辞というよりは、この好機を活かして所信を表明しようとするものだと言えそうだ。ではその特異性はどこにあるのか。他のスピーチがアメリカ文学の発展をいずれもイギリス文学を意識してニューイングランド中心に捉えるのに対し、トウェインのものは唯一その圏外のシエラ・ネヴァダ山中の鉱夫の口を借りて語る、西部人から見た東部文学世界への論評を含意するものであり、それはポストン中心の東部文学世界への「ゆさぶり」(H. N. Smith 168)、あるいはエドモンド・ウィルソンの言う「無意識の反目」(qtd. in H. N. Smith 169)の表れなのかもしれないのである。ホータンのスピーチが大いなる西部への人びとの移住に言及はするものの、あくまでもそれはニューイングランドから移住した人びとがニューイングランド文化の影響力を拡張していく視点に

立ち、『アトランティック』が「その生来の傾向や伝統において完全にニューイングランドの雑誌」であるという認識を示す。したがって「若くて極めて有望」だとホートン自身がそう呼ぶ作家でさえ、東部から寄せた波の「引き潮」とともに「我われのところに連れ戻」された作家だというわけである。こうした視点に立つ限り、トウェインのスピーチの本意はなかなか伝わり難いかもしれない。そればかりか、もしかしたら、ボストンの大御所詩人たちに対する「うやうやしさ」(H. N. Smith 169)に欠けるともとられかねない。

そうとはいえ、『ボストン・グローブ』は「マーク・トウェインの滑稽なスピーチ」(*Boston Globe*)について「この一風変わった話はクレメンズ氏独特の母音を伸ばしゆっくり話す調子で口籠るように語られ、会場には陽気な爆笑が炸裂した」(*Boston Globe*)と報じる。この記事が伝えるのは、会場の笑いが散発的なものではなく、集団的な笑いであることだろう(Caron 438)とする指摘があるように、トウェインが「いつものように列座の人びとをどっと笑わせた」⁸⁾さまは、ボストンの他紙も報じるところである。

ところがそうした報道や見解は、この事件を見直すトウェインが『自伝』で述べる内容とは一致しない。彼は「誰も笑ってくれなかった」(265)と言い、「人びとは恐怖で石化した」(266)と記すのである。これほどまでに彼が正反対の叙述をするのはなぜなのか。彼が「事件で被った大きな屈辱」(264)を〈真実〉として伝えるためなのか。それにしてもトウェインの描写では祝賀会は中断してしまい、台無しになるのである。そうとまで描くことによって、あるいは彼は、スピーチ事件への憤りを含意させるのか。

トウェインのその夜のスピーチは、『アトランティック』主催晩餐会のうち2度目のスピーチだった。そのことがまずい結果を引き起こす一因になったかもしれぬとジェローム・ラヴィングは仄めかす。1度目は1874年、「ある真実の話」の投稿が受理され『アトランティック』に初めて自作が掲

載されて招かれたときであり、まずは無難なスピーチだった。ではこの事件当時、トウェインはボストン中心の文学世界でいったいどのような位置だったのか⁹⁾。ハウエルズに言わせれば、『アトランティック』にとって「クレメンズはとても重要な寄稿者になっており、彼自身もこの雑誌に満足していたことははっきりしている。我われからの招待を大いに喜び受諾してくれたし、スピーチをする約束もしてくれた。後で分かったことだが、彼は並々ならぬ注意を払い、自信をもってスピーチの準備をしたのである」(My Mark Twain, 50)。ハロルド・K・ブッシュが述べるように、彼はすでに東部で一定の地歩を築き、西部出身の作家として決して新人ではない地位にあった¹⁰⁾と見てよいのではないか。問題は、すでに一定の地歩を築いた作家を(読者による評価だけでなく)東部文学世界がどう評価するかという点にあるのではないか。

その夜の祝賀会は、トウェインのスピーチの後も[プログラムの中断はなく]、ハウエルズの司会の下に全ての行事が進み、真夜中過ぎに終わった(Boston Globe)。

Ⅲ. 祝賀会におけるトウェインのスピーチ

『ボストン・グローブ』は「ホテル・プランズウィックでの昨夜の光景は、わが国ではめったに見られないリテラリー・フェアーズ〈文芸家たち〉の集まりだった」と報じる。その「めったに見られない」集まりを、トウェインは好機と捉えることこそが大事と思ったかもしれない。それでこそ、自分が日頃感じていることを話す意味がある、と。では、そのスピーチで何を言わんとしたのか。彼は、こう語り始める。

今宵は、リテラリー・フォーク文芸家たちの楽しい思い出を発掘するのに、まさにうってつけの機会です。したがって、私は自分の体験譚を少し話してみた

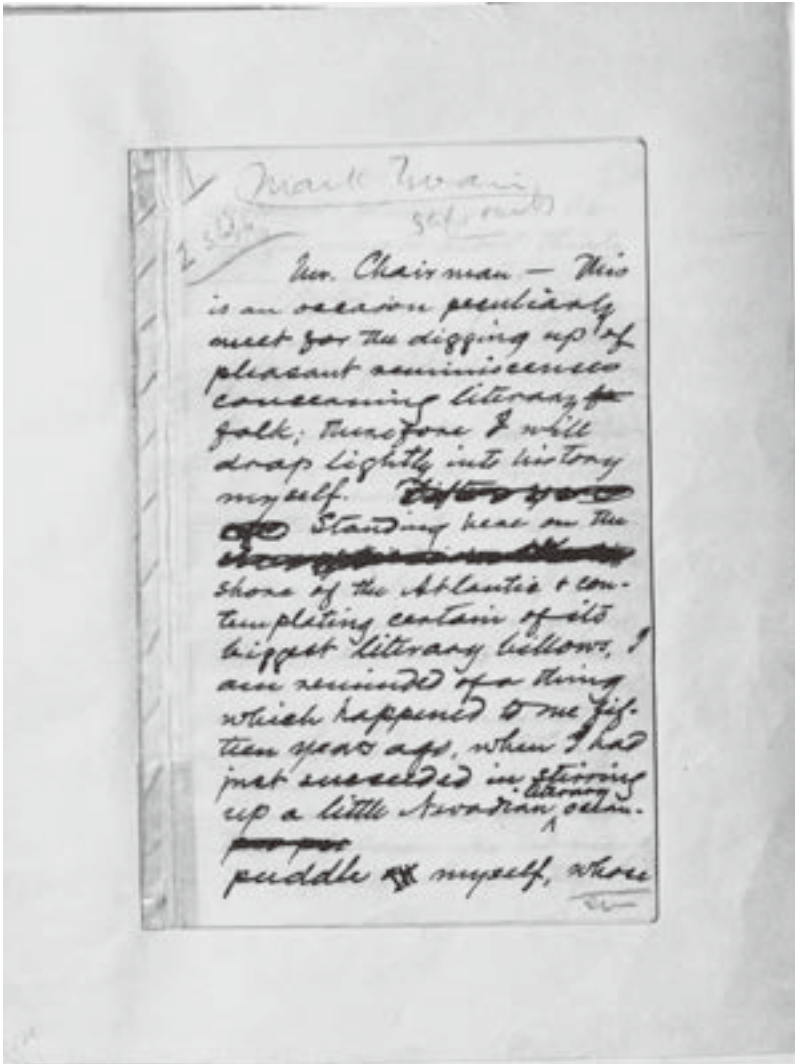


図2 マーク・トウェインによるスピーチの手書き原稿1頁
出所) Courtesy of the Beinecke Rare Book & Manuscript Library, Yale University.

アトランティック・オーシャン
いと思います。この大「西洋」の岸辺に立って、文学の海の大波が打ち寄せるさまに思いを巡らせておられますと、13年前に私の身に起こったある出来事が思い出されます¹¹⁾。そのころ、私自身はネヴァダのちっぽけな文学の水たまりをパシャパシャかき回すことに成功したばかりで、その泡の薄片がわずかにカリフォルニアの方に飛び始めていました。私はカリフォルニア南部をあちこち歩いて鉱脈調査をすることにしたのですが、未熟なのに何しろ自惚れ屋ときていますから、この機会に自分の筆名ノム・ド・ゲールの効き目を試してみようと思ったのです。ほどなく、よい機会が訪れました (261)。

『アトランティック』の出版人・ホートの挨拶に呼応させるかのように、雑誌名の元となった「大「西洋」^{アトランティック・オーシャン}」の岸に打ち寄せる「大波」と、「ネヴァダのちっぽけな水たまり」の「泡」との比喩によって、東部と西部の対比により、トウェインは「自分の文学的背景を戯画化」(亀井俊介 283)し、そのちっぽけな出自を謙る。大西洋いちばんの「大波」とは、エマソン、ロングフェロー、ホームズら東部文学界の大御所たちの含意となろう。

自分の筆名ノム・ド・ゲールの効力を試す機会は宿を乞うた鉱夫の小屋で訪れるが、その筆名を聞くなり鉱夫はげんなりする。というのもこの24時間以内に小屋に来た「4人目のブンゲー家」^{リタリリー・マン}がトウェインだったからである。聞けば、先客の3人とはエマソン氏、ロングフェロー氏、ホームズ氏の「くそいまましい奴ら!」¹²⁾だったという。文学界の大御所を「くそいまましい奴ら!」などと呼ぶとはどういうことか、トウェインはその訳を何としても聞きたいと鉱夫に懇願し、やっと話してもらうのである。

こうして自分の筆名に反応した鉱夫の態度からその名の効力は試せたわけであるが、自分の筆名を「4人目のブンゲー家」として数え、先の大御所3人と並べてみせるところに、じつは今宵のスピーカー／トウェインの

作家としての自覚と自負が示されるのである。したがってこのスピーチには、冒頭の〈謙虚なポーズ〉のすぐ後に、〈作家の矜持〉が示され、さらには結末で〈真の作家の覚悟〉が織り込まれることになる。結末のそれは、「私」が真の作家に求める自覚、あるいは覚悟とでも言えばよいだろうか。その領域へと至る、芸術的にも掘り下げた含意を孕むこのスピーチは、長年の友人ジョセフ・H・トウィッチェルの当時の日記（1877.12.18-19）によれば、トウェインはスピーチ原稿を「一言半句もおろそかにすることなく書いた——これまでにない最高の出来映えだと考えていた」と言う（qtd. in H. N. Smith 162）。

「私」は フレーム・ストーリー 冒頭部分の物語の語り終えると、今度は鉦夫のヴァナキュラー語りの聞き手に徹する。鉦夫は先客3人が「ブンゲー家」の名を騙る詐欺師であることを、じつはまだ知らない（ことになっている）。3人が粗末な身なりであっても徒歩旅行¹³⁾ すれば誰でもそうなるという理解の下、酒臭いことや「何とも風変わりな話し方」をすることも承知の上で、寛大にも宿を提供し、食事の世話をする。彼は「ブンゲー家のお偉方のやり方には慣れてない」と言いながらも、独りよがりな「ブンゲー家たち」3人をしっかり観察しており、批評し、物申す。少しも愚かでないばかりか、知性の持ち主である。この50歳の鉦夫と詐欺師たちとのやりとりを語ることが、ストーリーテラー／トウェインの今宵の仕事のようである。詐欺師といっても登場人物としては高名な詩人（の役を演じること）、言わば詩人の マスク 仮面をつけ、詩人を表象することを忘れてはならないのである。詐欺師たちの「何とも風変わりな話し方」とは、文語による観念的な詩句を詠ずる物まねぶりを言うのだろう。たとえば「偽ホームズ」は鉦夫の住む丸太小屋を検分して（ホームズ詩「オーム貝」より）こう謳う。

思考の深き洞穴より

かく歌う声を我は聞く——

汝、さらに荘厳なる館を築け

おお、我が魂よ！

だが鉦夫はきっぱりとそれを断る。「わしにはそんな金なんてないよ、ホームズさん。しかも、やだね。わしは見ず知らずの者からそんな風に言われるのも好かんのだ」。すると今度は「偽エマソン」が、ペーコンと豆の支度をする鉦夫を脇に呼び（エマソン詩「ミドリダテス王」より）こう詠ずる。

我が食に肉として瑪瑙^{めのう}を与えよ

我が食にカンタリスを与えよ

空と海から、あらゆる場所と高みから

我が食物を集めよ

「偽エマソン」はじつに超然としており、一方的である。目の前の鉦夫に向き合おうともせず、言葉は全て文語の詩句で発するのだ。鉦夫は苛立ち、「エマソンさんよ、悪いがここはホテルじゃねえんですよ」と言っては食事の支度に精を出す。すると今度は「偽ロングフェロー」が鉦夫の邪魔をして（ロングフェロー「ハイアワサの歌」より）こう発声する。

ムジキーウイスに栄光あれ！

汝、聞くがよい、ポープキーウイスがいかにして——

すると鉦夫は割って入り、「すまないがロングフェローさん、5分間ほどあなたの耳障りな音を控えてくれないか。そして、食事の用意をさせてくれんかね。そうしてくれると、わしはありがたいんだが」。料理中の鉦夫の反

応は日常の生活感覚に基づいている。「偽詩人たち」が物まね詠唱する抽象的な文語の詩句が、鉦夫の胸の思いに響くことはない。観念的で大げさ、現実を捉えるには漠としており、まずもってリアリティがないのである。鉦夫が発話する口語とは全く噛み合うことがなく、不釣り合いなままなのである。もっとも、不釣り合いとは言うものの、その場その場においてまことに当意即妙、才気煥発であり、つぎつぎと一見似つかわしい、だが意味するところは全くズレル3詩人の詩句を誦んじては口をつく。その詩句のパロディー化はまことに滑稽であり、またその準備をしたトウェインはじつに用意周到で、見事である。各詩句をそれぞれ操るトウェインのパフォーマンスたるやいかに、と想像してみたくなるほどである。なにしろ鉦夫、詐欺師たち、「私」、を演じ分けるのであるから。

さて、食事の支度ができ、鉦夫が酒瓶の用意をし始めると「偽ホームズ」はそれを見るなり突如興奮して真っ赤になるや（ホームズ「紅梅」より）こう叫ぶ。

血のごとく赤き葡萄酒をどつと^うづけ!

我、過ぎし日々^にに杯をあげん

いやはや、わしはだんだん腹が立ってきた。(中略) まあ、わしはあんな有名なブンゲー家の先生方に生意気な口なんか利きたかあなかった。けど、向こうさんの方がわしにそう仕向けたようなもんだ。分別のないなんてことは、わしには何もなかった。大勢の客がわしのしっぽを3、4回踏んづけても気にはならん、けど、その上に立ちっぱなしでことになると、話は違う。

この山小屋に葡萄酒はない。酒と言えばウイスキー。それなのに赤き葡萄

酒を注げ、と言う。鋳夫の方はこれ以上の我慢はならず、「偽ホームズ」にその怒りをぶつけるのである。彼らの横柄な態度には、鋳夫に対する蔑みがないとは言えない。トウェインは「ボストン・エリートの尊大さ」(Bush 65)を挿入している、とハロルド・K・ブッシュは指摘する。じつは鋳夫は詐欺師の本性の部分のみに批判的なわけではない。「詩人」の部分にも立腹しているのである。東部と西部の2つの世界の懸隔に見えながら(見せかけながら)、神々しい人びとと一般庶民の懸隔をも提示する。それは神聖な詩人の高踏的な(形而上学の)世界と一般庶民の世俗的な(形而下の)世界との懸隔でもある。この「炉端の詩人たち」が口ずさむ詩句に鋳夫が胸打たれることはない。鋳夫の日々の感覚や思いには到底届かない。

ついに「詩人たち」はウイスキーを飲み、トランプ賭博¹⁴⁾をし、喧嘩を始める。詐欺師の地金が出てしまう乱暴ぶりである。彼らが口ずさむ詩は混乱し始め、ローウェルやブライアントやホイットティアの詩などと入り混じって来る。鋳夫の話に耳を傾けている「私」には、3人が詐欺師に相違ないことはすでに分かっているはずである。言うまでもなく、会場の聴衆にもそれは分かっているだろう。それでも詐欺師の姿を明々白白にする必要がストーリーテラー／トウェインにはある。

詐欺師たちは翌朝小屋を発つのだが、そのとき「偽ロングフェロー」は世に聞こえた詩句を(ロングフェロー「人生賛歌」より)口ずさむ。

偉大な人の生涯はみな我らに教うなり
我らの生涯もまた崇高にしよう
そして旅立つときは我らもまた
時という砂に足跡を残しよう

ロングフェローの名を騙る詐欺師は、高邁な詩の精神とは裏腹に自分のブ

ーツは大事に小脇に抱え、鉦夫のブーツをちゃっかり盗んで履いて行く。すっかり詐欺師に戻っているのだ。はたして鉦夫には「ブンゲー家のお偉方」から何か得るものがあったろうか？ 鉦夫の語りを聞き終えると「私」は鉦夫にこう伝える。

「いいかい、連中は、私たちや世界の人びとが敬愛する礼儀正しい詩人じゃなかったんだよ。連中は詐欺師だったんだ。」

すると鉦夫は冷静な目でしばらく私をじっと見つめ、それから言った。「ああ、詐欺師だったんですかい？ じゃあ、あんたも？」

以上で鉦夫の話は終わる。最後に鉦夫から突き付けられた問いかけは、「私」にはシリアスな問いとなる。この皮肉な一文に籠めるストーリーテラーの含意は重い。自分は詐欺師ではない、本物の作家のはずだ、しかし果たして本物なのか。鉦夫にじっと見つめられ、一瞬不安に襲われながらも、真剣に考えてみる。そもそも作家にいかがわしい側面がないと言えるだろうか、真実を書くとはどういうことか？〈文学と詐欺行為とは相互交換可能である〉と鉦夫は示唆したのではあるまいか。ならば作家と詐欺師もまた交換可能か？ 真の作家ならばこれは自戒すべきことである、と。こうして「私」は〈真の作家の覚悟〉を迫られる。ネヴァダの鉦夫が〈本物の作家の奥義〉を喚起させ、その実質を問うたのである。あんたも詐欺師？ あんたは何者？ トウエインは、アメリカの文芸家たちのめったにない集いで、真の文学者とはいかなる存在かを問う。じつに見事な出来映えではないか。「うわべはほんの一介のユーモア作家ではあれ、いかにひとかどのア・マン・オヴ・レターズ文学者たり得るか」(Caron 456)をトウエインは示すのであり、またそのことを彼のスピーチが例証するのである、とキャロンは論じる。

高名な3詩人の名を騙る詐欺師を登場させ、その「偽3詩人」をパロディ

イー化したトウェインは、大胆にもそれを3詩人が主賓席に同席する『アトランティック』の祝賀会で披露した。その所為もあろうか、このスピーチが「ホイットィア70歳祝賀スピーチ事件」を引き起こすのである。それはまさに1877年当時のアメリカ文学・文化が直面していた状況を映し出す出来事であった。

IV. 『マーク・トウェイン自伝』におけるスピーチ事件の見直し

本稿第I節で見た通り、トウェイン自身による本スピーチ事件の見直し（つまり自己評価）は1906年1月に始まる。その作業が『自伝』に記録されるのは、つぎの4回である。第1回1906年1月11日、第2回1906年1月23日、第3回1906年5月23日、第4回1907年10月3日。この2年足らずの間に4回も記録されるということは、彼がこの事件にそれほどにもこだわっていたことの表れかもしれない。そして結局その最終判断は、第1回に下した結論に帰着する。

もっとも第4回の見直しは、『ノースアメリカン・レビュー』誌に自伝の生前公刊（「我が自伝からの抜粋」）を決めた際に実施された（と考えられる）。つまり、スピーチ事件の自己評価を生前公刊するにあたり、一定の判断が必要だと考えたからであろう。公刊された雑誌連載では結論部に大事な最終パラグラフの削除があり、当時未公刊だった『自伝』とは重要な点で異なる。この点もなかなか興味深い問題である。つまり、トウェインは彼の最終判断を未公刊のまま『自伝』に遺し、部分公刊ではスピーチ事件をおのれの落ち度であるとする、まずは無難な、受動の見解にとどめたようだ。だが、死後出版の『自伝』本文はそれとは異なり、おのれに落ち度はないとする、より積極的な能動の見解を絞り出す。

(1) 第1回自己評価(1906年1月11日)

先述の通り、読者からの手紙に励まされて事件の吟味は始まる。これは言わば事件の被害者側の見直し作業であり、被害者本人が当時を振り返って吟味するものである。まずはスピーチ原稿、ついでそのパフォーマンスと現場の反応、この2つが見直し作業の柱となる。第1の柱については、何度読み返しても何ら問題はない。では、第2の柱はどうか。以下は第1回の吟味結果を示す結論前半部分である。この結論前半部分を便宜上「自己評価X」と呼ぶことにしよう。そしてさらに吟味を続けた結果を示す結論後半部分(『自伝』口述1月11日最終パラグラフ)を「自己評価Y」と呼ぶことにしよう。「自己評価X」はかつてのスピーチ事件は自分に落ち度があるとする、「自己評価Y」は自分に落ち度はないとする。

トウエインはもともとこのスピーチ原稿にはそれなりの自信を持っていたようであり、メアリー・M・フェアバンクス夫人への当時の手紙にもそうした内容を書き送っている。それは「私の(書くものの)平均的な出来映えより、かなりよいものなのです」(217, A letter to Mrs. Fairbanks, Feb. 5, 1878)。なるほど、このスピーチ原稿には思い入れがあったのだろう。見直し作業が始まってからも、『自伝』への収録(1906.1.11)に際し、彼は昔の原稿を修正する。H・N・スミスがその修正箇所を明示しており(Appendix, 176-177)、たとえば、冒頭部分の興味深い手直しに、“fifteen years ago”を“thirteen years ago”とする箇所がある。この修正によって、「13年前」が1864年を指し、それによって彼の実体験を正確に踏まえるだけでなく、筆名の効き目を試すにはより有効な時期になる。合点のいく修正である。また、“a little Nevadian literary ocean-puddle”を“a little Nevadian literary puddle”と修正する。この修正によって“ocean-”が削除され、大きな「大西洋」対「ネヴァダのちっげな水たまり」の比較・対照がより強調され、これもまた合点できる。もう1例挙げると、“dad fetch the lot!”を“consound the lot!”

とする修正がある。この語句はボストン・ハイカルチャーの人びとには上品な言葉ではないだろうが，“consound”は“confound”の異形だという（Bush 64）。修正前の言葉が発せられたとき、列席者の表情は一変し、傾聴が途切れてしまったとトウェインが振り返る箇所に該当する。

本稿に掲載した図2¹⁵⁾は、トウェインのスピーチ（手書き原稿）1頁目を写真複製したものである。上記に挙げた3つの修正箇所が確認できるだろう。こうしたトウェインの熱心な修正作業に触れることにより、原稿執筆時のかつての熱意や思いが想像できるだけでなく、本件見直しに臨む彼の「現在」の意欲さえ伝わって来そうである。

以下は「自己評価X」部分であり、『自伝』口述（1906年1月11日）分の最後から2番目のパラグラフである。

さて、今、私はそのスピーチ原稿を取り上げ吟味している。先にも話したように、それが今朝ボストンから届いたのだ。私はそれを2度読んでみたが、私が馬鹿でない限り、最初の一語から最後の一語まで何の欠点もなかった。それは申し分ない出来である。才気煥発で、ユーモアたっぷりだ。どこをとっても、無作法と思われるところや、粗野なところなどはない。あの場では、いったい何が問題だったのだろう。誰も大声で笑わないなんて驚きであり、信じられない。それに、あの神々しいばかりの人たちに一番大声で笑ってほしかったのに。落ち度は私にあったとでも言うのだろうか。私があんな風変わりなやり方で語ろうとした、当の偉大な人たちをその場で目にして勇気を無くしてしまっただろうか。もしそうだとしたら、もし私が怯みを見せたとしたら、一応の説明はつく。というのも話すことが恐くなったら、うまく笑わせることなどできないからだ。うーん、釈然としない。しかし、もしあの愛され敬われる旧時代の不滅の詩人たちを今この世に呼

び戻し、カーネギーホールの舞台上に上がってもらえたら、私はかつてと同じスピーチ原稿を使って一語もたがえず演じ、彼らを笑わせ、舞台いっぱいにとろけさせてしまうのだが。ああ、落ち度は私にあったに違いない。断じてスピーチ原稿ではない。(267, 二重下線強調はトウエイン, 一重下線は引用者)

上記の吟味過程で明瞭になるのは、パフォーマンスの現場で2つの力がせめぎあうさまである。その力の1つをスピーカーの力Aと表記すれば、Aは最高のパフォーマンスでユーモアたっぷりに語ろうとする力。もう1つを力Bと表記すれば、Bはもともと偉大な存在として君臨し、主賓席に陣取る偉人たちの力ゆえ、その力には威力があり、他を威圧する権威がある。A>Bならば、パフォーマンスは成功するだろうが、そうした力関係はカーニバル等の機会でもなければ普通はめったに見られない。A<Bならば成功は難しいだろう。

本稿図1祝賀会座席表から分かる通り、会场上座にはホイットィア、ロングフェロー、エマソン、ホームズらが着座している。上座に向かって左手外側、前から9番目(真ん中よりわずかに後方)がトウエインの席である。あたりを静まり返らせる力Bは厳粛な力であり、荘厳で高貴で神聖。その力Bには威厳が宿る。だから、もとより笑いなど萎縮させてしまう。力Bが圧倒すれば、滑稽な話など失敗するのは目に見えているではないか。そもそも笑いなんてものは上品ではない、ということか。しかし力Bについて、不問に付してよいのか。圧倒的な厳粛さを疑問視するのは不謹慎か。

偉人たちの威圧に圧倒されて怯んだとしたら自分に落ち度があるからだとするが、必ずしも素直に自分の落ち度を認めているというわけでもない。釈然としない状態で、自分の落ち度を認めるのだ。だから、3詩人にこの世に戻って来てもらい、同じスピーチ原稿で今再演するならば、今度は彼

らを笑わせてみせると意気込むのである。昔のスピーチのこの再演について、彼は実際に検討しており、そのことでハウエルズやトウィッチェルに意見を求めたりしている。意外にも本気だったようだ (Howells 54)。ならば「自己評価X」だって単なる無難な結論ではないことが分かって来る。

それでは「自己評価Y」の部分で何を考えているか。「自己評価X」部分の叙述と「自己評価Y」部分の叙述の間には後者における比喻に大きな飛躍があるが、祝賀会場をボストンの町全体に広げた場合が「自己評価Y」の描写世界であると考えればよかろう。町中が震え上がるほどボストンが威圧されている状況を描いている。ただ事ではない力がボストン中に襲い掛かっている姿であろう。そんな大きな力によってトウェインは何を表現しようとするのか。彼は「威厳」や「威圧」の力を具体的なイメージにするのである。まるでボストン中心の文学世界の権威を1つのイメージにするかのようだ。目に見えない抽象的な権威というものをイメージ化して、ボストン虐殺¹⁶⁾のときよりも怖い力、アンソニー・バーンズ事件¹⁷⁾のときよりもさらに怖い力、そんな大きな力に威圧されてしまったらいったい何ができると言うのだろうか。「落ち度があるのはボストンなのか私自身なのかははっきりさせたい」(267)とは、間違っているのは巨大な力なのか私自身なのか、はっきりさしたいの謂いであろう。落ち度があるのは、ボストン中を震え上がらせてしまう威力を振るう大きな力なのか、あるいは私なのか。私であろうはずがなかろう。だからボストンの知性の集まりである「20世紀クラブ」で私が昔のスピーチをそのまま再演したら、きっと彼らは笑い賞讃してくれるはずだと、その点を「自己評価Y」は確信しており、もし彼らが笑わなければ私はその場で自殺してやるとまで言うのである¹⁸⁾。

トウェインが見直し作業の中で使う言葉に「あの恐れおおい、神のごとく崇拜される人たち “those awful deities” (266)」や「あの神のごとく崇拜される人たち “those deities” (267)」, 「神 “the Deity” (266)」, 「三位一体

“the Trinity” (266)」などがある。こうした表現はもともとスピーチ原稿にはない。見直し作業の『自伝』に出現する「神性」を意識した語の使用には、文学の神聖化・偶像化を嫌う彼の態度が表れていると見てよいだろう。この見直しでそれらを意識的に使うところに、スピーチ事件に対するトウエインの反応がはっきり表れていると思われる。怪しからんと彼が考えるのは、高名な詩人たちの「神聖」を冒涇したと見做すこの事件の騒ぎ方である。彼の見直し作業はその点を十分意識したものになっている。詩人や文学者を神聖視することこそ問題なのである¹⁹⁾。もともとスピーチ原稿で鉦夫が使う言葉は「ブンゲー家 “littery man” (261)」や「ブンゲー家のお偉方 “littery swells” (262)」, 「あんなに有名なブンゲー家の先生方 “such famous littery people” (*Ibid.*)」である。

あのスピーチで失敗した責任は、おそらくボストン中心主義の当時の東部文学世界にあっただろう、つまりは確立された既成の文化ヒエラルキー、H・N・スミスの言う「制度化された文学者の慣習 “the institution of the Man of Letters”」(168)にあったろうとする解釈を「自己評価Y」によって示唆し、トウエインはより積極的な、能動の見解を絞り出すのである。やはり彼は、失敗をおのれの落ち度だとする解釈には納得できない。自分の側に落ち度はないと判断し、東部文学世界の権威に縛られた解釈を拒むのである。文学の新たな担い手が、すでに各地で活動しているのだから。

(2) 第2回自己評価 (1906年1月23日)

あのスピーチの再演を実際に検討していたトウエインは、その具体的な機会(来る1月27日にワシントンで開催予定のグリダイアン・クラブでの講演に招かれている)が近づいたこの日、トウィツェルからスピーチの再演は気が進まないのかと尋ねられると、再演は諦めた、と答えてつぎのように述べる。しかし明確な理由を示すわけではない。「ただ直観的なもの」と言うだ

けである。ただし、机上の空論ではなく、あのスピーチの再演を具体的な状況下で、おそらくは再演する自分の姿をも想定しながら検討したのだろう。

それ以来、あのスピーチ原稿を2度ほど吟味してきたからだが、私の考えは変わったのだ。すっかり変わってしまった。スピーチ原稿は粗野で、無作法である——うーん、これ以上詳しく続ける必要もなからう——最初から最後まで、どの部分も好きじゃない。(中略)私が見方がこのように変わったことをどう説明すればよいのだろう。私には分からないし、それを説明することもできない。私はその当事者なのだ。もし自分を自分の外に置き、直接かかわりのない人間の視点から吟味できるなら、自分の考えが変わったことを納得できるまで分析してきつと説明できるだろう。(中略)スピーチ原稿は自伝にそのまま入れておこうと思う。というのも、スピーチ原稿がどうあれ、それについての考え方が変わるってことが興味深いと思うから、それは残すことにしよう。(310)

(3) 第3回自己評価 (1906年5月25日)

つぎに、第2回自己評価とは正反対の心境の変化が、その4か月後の第3回自己評価(5月25日)に現れる。今度は、第1回の見解へと引き戻されるといふものであり、短い注記として記録される。

注記「5月25日。(中略)それから、スピーチ原稿を最終的に——声に出して——元気いっぱい読み終え、原稿を称えた以前の私の考え方にまっすぐ戻った。M.T.」(310、強調はトウエイン)

5月のこの時期、口述開始以来の自伝(タイプ)原稿の読み直し作業を進め

ていたトウェインは、第2回自己評価内容（1月23日の口述分）を5月25日に読み直しており、同日、上記注記（最初の見解にまっすぐ戻ったこと）をサイン入りで記すのである。

その一方、トウェインは速記者ジョセフィーン・ホビーがタイプ打ちした自伝口述原稿を読みながら、どうやら自伝原稿からの抜粋を雑誌に掲載することを考え始めたようだ。『ノースアメリカン・レビュー』誌編集長ジョージ・ハーヴェイが招かれてトウェインのもとを訪ね、大量の自伝タイプ原稿を読み、たちまちその自伝に惹き込まれ夢中になったのは、1906年7月末のことである。ハーヴェイは雑誌連載1年分用として24箇所を精選した。この24箇所の中に、1月11日の口述分（スピーチ事件の吟味）も当然含まれていた（と考えられる）。

（4）第4回自己評価（おそらく1907年10月3日）

雑誌連載が決定した全25回（1906年9月号から1907年12月号）では、その最終回に、ホイットィア70歳祝賀スピーチ原稿の全文とスピーチ事件を吟味した自己評価内容（ただし「自己評価Y」を除く）を収録することになる。この雑誌掲載の段階で、スピーチ原稿のさらなる細部の修正もあったようだ（H. N. Smith, Appendix 176）が、本稿では事件に対する自己評価内容を生前いかに公刊したかについて検討したい。その検討にあたり、まずは出版における事実関係を明確にしておこう。

1. 雑誌連載「我が自伝からの抜粋」最終回（1907年12月号、生前出版）
「スピーチ原稿全文」＋「自己評価（評価Y部分を除く）」＋「小犬についての〈人担ぎ〉話」を収録。
2. 『マーク・トウェイン自伝』第1巻（2010年刊、死後出版）
「スピーチ原稿全文」＋「自己評価の全文」を収録。

以上の通り、もし自己評価から「評価Y」部分の生前公刊が控えられるなら、スピーチ事件に対する無難で受動的な判断（つまり事件の落ち度は自分にあるとする姿勢）が読者に伝わることになる。作者生前の出版である以上、スピーチ事件の自己評価をどこまで公表するかについては、本人はもちろん出版社側にもそれなりの判断が求められるだろう²⁰⁾。そのときトウェインにはどのような選択の余地があり、いかなる工夫や判断が可能だったか。結論から言えば、彼はスピーチ事件と抱き合わせる形で、「小犬についての〈人担ぎ〉話」（手元不如意の青年〔トウェイン〕が他人の小犬を売って一杯食わせ、3ドル儲ける〈人担ぎ〉の話）を連載最終回用に挿入するという工夫をした、あるいは、まさにスピーチ事件と抱き合わせる素材として意識的にこの〈ホークス hoax〉を新たに執筆した（1907年10月3日の自伝口述）のではないかと推論しうる。

『自伝』第1巻の編者ハリエット・E・スミスの充実した序論によると、雑誌に連載する自伝原稿は主に『ノースアメリカン・レビュー』編集長ジョージ・ハーヴェイの主導によるものだった（46-56）。最終決定にはもちろんトウェインも同意しているし、ハーヴェイの編集の見事な手腕を大いに賞讃してもいる²¹⁾。したがって、もしかしたら雑誌連載最終回にスピーチ事件を配置し、「自己評価X」までとする編集案は意外と早くからハーヴェイによって出来上がっていたかもしれない（1906年7-8月、ハーヴェイが最初に自伝原稿を読んだ段階）。トウェインは基本的にはそれを受け入れている。しかしトウェインの立場を推論すれば、「自己評価Y」を省いてスピーチ事件の被害者のまま終わるわけにはいかない、それもスピーチ失敗の落ち度をおのれが引き受けるというのでは何とも釈然としない、ボストン中心の東部文学世界との葛藤・衝突をそうした形で終えるわけにはいくまいという心境だったのではないかと推論する。そこで、1907年10月3日、雑誌連載最終回入稿の直前、トウェインは自身が東部に出て来たばかりのころの体験か

ら「人担ぎ」のエピソードを脚色ないしは「創作」し、スピーチ事件と抱き合わせる最終回の編集案を考案した、といったことを推論してみたい。そうすれば、スピーチ事件という屈辱的な被害を受けた話題で終わらず、自ら能動的に動いて人担ぎを成功させた、楽しいエピソードを伝えることができる。つまりワシントンで出会ったマイルズ中將に一杯食わせ、手元不如意のまま犬の持ち主から3ドル稼ぐ悪ふざけの話を抱き合わせるのである。その日が終わるまでにどうしても3ドル手に入れなければ立ち行かないジャーナリストの若者2人〔トウェインと友人〕は、これでもようやく生き延びることができるのだった。この人担ぎのユーモアは受動ではなく、社会に対する能動の仕掛けになっている。しかも人担ぎの手の内をすっかり読者に見せながら、読者を巻き込んで語るのである。この世の中を生き延びていくために知恵を出す。スピーチ事件では被害者としてずいぶん叩かれもしたけれど、叩かれてばかりではなく、生きぬく。そこにも真実はあるのですよ、と。つまり、能動の姿勢と抱き合わせにして「我が自伝からの抜粋」を公刊するという判断である。

1906年7-8月にトウェインを訪問して3泊4日の集中的な編集作業に没頭したハーヴェイは、それ以降の（タイプ）原稿コピーが各1部追加されたとき（H. E. Smith 32-46）ハーヴェイの手元にもその1部が送られたと推測できる。つまり『自伝』口述の編集作業はその後も以前同様にハーヴェイ主導でなされたと考えても不自然とは言えまい。言い換えれば、件のスピーチ事件を雑誌連載最終回に置く編集案は、すでに当初の8月段階で決まっていた。ただし、そこにトウェインの意向が働く余地があるとすれば、1907年10月3日に口述したばかりの、事実と虚構を織り込んだ「小犬についての〈人担ぎ〉話」を過去の体験談として掲載する（ハーヴェイの基本的判断に合わせる形で自分をも活かす）方法である。連載最終回は、前半はハーヴェイ主導の編集によるスピーチ事件、後半はトウェイン主導になる〈ホ

ークス〉の2つを抱き合わせるという共同編集というわけである。

こうして連載最終回前半部だけを読めば、スピーチ事件をトウェイン自身がどう判断したかについて読者が知ることになるのは、「ああ、落ち度は私にあったに違いない。断じてスピーチ原稿ではない」という見解である。しかし、これではスピーチ原稿が孕む「揺さぶりの効果」が活きない。したがって、読者だってトウェインを誤解しかねない。だが、それを救うのが後半部の〈ホークス〉ではなからうか。そのユーモアによって、ギリギリのところでは何とか身を守ろうとするのである。一杯食わせた本人がその相手〔小犬の持ち主〕から感謝されたりするさまを読みながら、すでにこの話に巻き込まれている読者も思わず笑ってしまいそうである。

この〈人担ぎ〉話の最後は、こう終わる。「さて、私の話はこれでおしまい。少しは真実だってありますよ。」ここでも、末尾に籠めるストーリーテラーの含意は意味深長である。何だか一杯食わされたかもしれないという思いにもなるのだが、これが連載最終回の掉尾であるため、自伝全体の掉尾でもあり、私のライフストーリーはこれでおしまいですが、少しは真実だってありますよ、と言う含意にもなって来よう。

コンスタンス・ルアークが述べるように「ユーモアはファンタジーの問題」(20)であり、「奇想の一種」(11)、それを構想する力であるならば、この〈ホークス〉と抱き合わせることによって、スピーチ事件をもっと大きな視野から捉えてみることを促す、彼の強靱でしなやかな精神さえも感じさせてくれる。当方は参ってなどいませんよ、本当はこちらに落ち度はないのですからね、と言うように。それと同時にユーモアのレトリックに何ができるか、また何ができないかを考えさせてくれもするのである。

こうしてトウェイン生前のスピーチ事件の見直しは終了する。だが『自伝』出版の暁には、「自己評価Y」部分を含む全体が多く読者に読まれることをすでに彼は仕掛けているのであり、100年後の「未来」をも思い描い

ているのである。実際、彼の意志に基づき、没後100年の年（2010年）に本『自伝』は無削除新版として公刊された。今や読者はトウエインの「自己評価全体」を読み、いっそうの理解を深めるのである。

付 記

本研究はJSPS 科研費JP20K00381の助成を受けたものである。

注

- 1) *Autobiography of Mark Twain*, Vol. 1. 以下、『自伝』と略記する。本書からの引用ページ数は（ ）内数字で示す。
- 2) *Autobiography of Mark Twain*, Vol. 1, p. 260. ハドソン夫人の手紙は全文収録。
- 3) トウエインの *Mark Twain's Speeches* は死後出版であるため、夫人がどこを探しても見つからなかったはずである。*Mark Twain's Speeches. With an Introduction by William Dean Howells.* Harper and Brothers Publishers, 1910.
- 4) “The Boston Daily Globe Reports on the Whittier Dinner.” *The Boston Daily Globe*. Tuesday Morning, December 18, 1877.
- 5) ハーバード大学ホートン図書館収蔵のホイットィア70歳祝賀関連未公刊資料の中からH・N・スミスが発掘し、スミスの論文の中で初公刊とされた。出席表を兼ねており、招待者ならびに出席者が分かる。ホートン図書館 *Harvard Library Bulletin* 編集長・研究情報担当司書ミチ・ナカウエの親切な協力を得て、鮮明な写真複写を本論に収録することができた。心より感謝したい。
- 6) 『アトランティック』が女性作家たちを排除したため、*Rochester Democrat* や *Hartford Courant* 紙の批判を買った (qtd. in Caron 436, 461 n.2)。晩餐会後の式次第（詩の朗読やスピーチ等）には新聞記者や女性など、招待客以外の他の参加者の入室が許可された。
- 7) 『アトランティック』の20周年祝賀会挨拶であるとはいうものの、競合誌である *Harper's New Monthly Magazine* (1850年創刊) や *Nation* (1865年創刊)、*Scribner's Monthly* (1870年創刊) 等との間ですでに読者の獲得競争が始まっており、極めて文学的で学問的な *The Atlantic Monthly* の実情とはといえば、この時期販売部数を減らし、苦戦していたようである (Sedgwick 11-12, 157-159)。
- 8) *The Boston Evening Traveller*, 18 December 1877, p.1 (qtd. in H. N. Smith 147). 祝賀会場の聴衆の反応を伝えるボストン各紙の積極的な表現による報道から考えれば、「クレメンズのパフォーマンスは明らかに成功したのだと私は

- 言いたい」とキャロンは論じる (454)。
- 9) カリフォルニアを後にして、1867年1月に東部にその活動の場を移してから、旅行記『赤毛布外遊記』(1869)や『苦難を忍びて』(1872)が大評判・大好評を得ていたし、チャールズ・D・ウォーナーとの共著『金めつき時代』(1873)や小説『トム・ソーヤの冒険』(1876)も出版していた。こうして見る限り、トウエインは作家として東部で活動基盤を固めてきているようである。H・N・スミスによれば、それでも彼の助言者たちは、とりわけフェアバンクス夫人(クエーカー・シティー号遊覧時以来の友人、トウエインの随時の相談役)、クレメンズ夫人やハウエルズは、トウエインに「敬意ないしはうやうやしき“reverence”」を教えようとしていたという。そうした助言者たちにとっては、東部での作家としての彼は、なお「試験的に試されている」(H. N. Smith, 169) 側面のある作家だったと言えるようだ。
- 10) Bush, “Mythic Struggle between East and West.” ブッシュはハウエルズの態度について、H・N・スミスやキャロンとは異なり、同じ西部出身の作家としてトウエインにかなり近い存在と見ている。
- 11) 13年前にあたる1864年5月、トウエインはヴァージニア・シティー『トリリアル・エンタープライズ』紙記者を(20か月の記者歴後)やむなく辞め、サンフランシスコ『モーニング・コール』紙記者をしながら週刊文芸誌『カリフォルニアン』に寄稿するようになった。彼のスピーチに「カリフォルニア南部の鉱脈調査」とあるのは、同年12月をはじめ、またしてもやむをえずサンフランシスコを去り、再びネヴァダに戻ってスティーヴ・ギリスの兄弟ら(ジムとピリー)とともにジャッカス・ヒルの小屋に住んで、近くのエンジェルズ・キャンプを訪ねるなどした12週間の体験を踏まえたものだろう。「跳び蛙」や「アオカケス」の原話に耳を傾けて過ごしたのもこの時期である(*Autobiography of Mark Twain*, vol. 1, 552-553n.)。
- 12) 本文中の“consound the lot!” (261)「くそいまいましい奴ら!」の“consound”については、*A Mark Twain Lexicon*に“A blend of confound and consarned?”とある。また、Bushは彼の論文中でつぎのように解説する。すなわち“Twain openly puns on the word literary by having the miner mispronounce it as “lityer”; and the miner’s “consound,” a variant of “confound,” condemns the impersonators” (64)。
- 13) Gary Scharnhorstはいずれの先行研究もトウエインのスピーチの背景にある“tramp”(放浪する失業者)を見落としてきたと指摘し(231)、トウエインのスピーチの詐欺師たちが“tramp”であることを示唆する。“tramp”とは、1873年の恐慌や1877年の鉄道ストライキの結果生み出された、新たな社

- 会現象としての「放浪する失業者」を指す、と（Michael Denning を援用して）シャルンホルストは説明する（231）。有益な指摘であろう。
- 14) スピーチ事件でのトウェインの詫び状に対しエマソンの娘が送った返信（transcribed in H. N. Smith 166-167）に、エマソンは「生涯カードを見たことがなかった」と記している。すでに西部へ何度も講演に出かけていたエマソンだが、さすがにトランプ賭博の世界は知らなかったのである。したがって、本物のエマソンならば賭博に加わることはできないだろう。
 - 15) 図2は、イエール大学バイネッケ図書館所蔵の唯一のトウェインのスピーチ原稿（オリジナル）からの写真複写。同図書館の協力により本稿への収録が実現した。手書き原稿からのタイプスクリプト全文が、H・N・スミスの論文（Appendix）に公刊され、これによってトウェイン自身の修正箇所が分かる。スミスによると、彼は少なくとも2度の機会に修正しており、1度目は『自伝』に収録したとき（1906年1月11日）、2度目はさらにそれを修正して『ノースアメリカン・レビュー』誌（1907年12月最終回）に収録公刊したとき（1907年10月3日）である（H. N. Smith 176-177）。
 - 16) 1770年3月5日、イギリス正規軍部隊がボストンの植民地住民に発砲、5人が殺害された。
 - 17) 1854年、逃亡奴隷アンソニー・バーンズがボストンで逮捕。大規模な抗議にもかかわらず奴隷主の元へ強制送還された事件。
 - 18) ところが、どうやらH・N・スミスは、トウェインの「自己評価Y」を誤解しているようである。と言うのも彼は「マーク・トウェインはボストンに対して不公平だった」（161）と論評するからである。「自己評価Y」においてトウェインが〈ボストンの町を震え上がらせるような大きな力〉に批判的であるからと言って、彼はアンソニー・バーンズ逮捕に抗議した大勢のボストンの人びとを批判している訳ではない。同様に、トウェインのスピーチを概して貶さなかったボストン各紙の報道を、彼のスピーチを非難した中西部や地方新聞の後日の報道とをトウェインが同列に扱っているわけでもない。上記スミスの論評には曖昧さが残る。
 - 19) かつて、チャールズ・ディケンズ朗読会（ニューヨーク）の報告記事を書いたとき、若きトウェインは老作家に敬意をこめて、しかし神格化・偶像化を排し、臆することなく人間ディケンズ像を記録したのだった（「マーク・トウェインのワシントン通信」1868.1.11発）。
 - 20) たとえばハドソン夫人からの手紙の公表は控えられ、夫人の本名は「H夫人」と変えられた。夫人に書き送ったトウェインの返信のみを掲載。一方、死後出版の『自伝』には夫人の手紙の全文を収録し、本名で公刊した。

21) 参照 井川真砂 「書評：里内克巳訳『[連載版]マーク・トウェイン自伝』」。

引用・参考文献

- “The Boston Daily Globe Reports on the Whittier Dinner.” *The Boston Daily Globe*. Boston, Tuesday Morning, December 18, 1877. <https://twain.lib.virginia.edu/onstage/whitnews.html>. Accessed 31 Aug. 2020.
- Barrow, David. Afterword. *Speeches*. Edited by Shelley Fisher Fishkin, Oxford UP, 1996. pp. 5-6.
- Billington, Sandra. *A Social History of the Fool*. The Harvester Press, 1984. 『道化の社会史』石井美樹子訳, 平凡社, 1986年。
- Budd, Louis J, editor. *Critical Essays on Mark Twain, 1867-1910*. G.K. Hall, 1982.
- Bush, Harold K. Jr. “The Mythic Struggle between East and West: Mark Twain’s Speech at Whittier’s 70th Birthday Celebration and W.D. Howells’ *A Chance Acquaintance*.” *American Literary Realism, 1870-1910*, vol. 27, no. 2, 1995, pp. 53-73.
- Caron, James E. “The Satirist Who Clowns: Mark Twain’s Performance at the Whittier Birthday Celebration.” *Texas Studies in Literature and Language*, vol. 52, no. 4, 2010, pp. 433-466.
- DeMarco, Laura. *Mark Twain’s America: Then and Now*. Pavilion Books, 2019.
- DeVoto, Bernard. *Mark Twain’s America*. Illustrated by M. J. Gallagher. Little, Brown, and Company, 1932.
- Holmes, Oliver Wendel. “To Mark Twain.” *Critic*, VII (November 28, 1885), p. 253.
- Howells, William Dean. *My Mark Twain: Reminiscences and Criticism*. Edited and with an Introduction by Marilyn Austin Baldwin, Louisiana State UP, 1967.
- . Introduction. Mark Twain’s Speeches: With an Introduction by William Dean Howells in *Speeches: Mark Twain*. Edited by Shelley Fisher Fishkin, Oxford UP, 1996.
- Kiskis, Michael J. Afterword. *Chapters from My Autobiography*. Edited by Shelley Fisher Fishkin, Oxford UP, 1996. pp. 1-21.
- . “Coming Back to Humor: The Comic Voice in Mark Twain’s Autobiography.” *Mark Twain’s Humor: Critical Essays*. Edited by David E.E. Slone, pp. 541-569.
- . Introduction. *Mark Twain’s Own Autobiography*. Edited by Michael J. Kiskis. U of Wisconsin P, 1990, pp. xv-xl.

- Levine, Lawrence W. *Highbrow / Lowbrow: The Emergence of Cultural Hierarchy in America*. Harvard University P, 1988. 『ハイブラウ／ロウブラウ—アメリカにおける文化ヒエラルキーの出現』常山菜穂子訳、慶応義塾大学出版会、2005年。
- Loving, Jerome. “Birthday Party Brouhaha: Mark Twain’s Infamous Toast Rocked the Sensibilities of Boston’s Brahmin Establishment.” *Humanities*, vol. 29, no. 6, Nov.–Dec. 2008. www.neh.gov/humanities/2008/novemberdecember/feature/birthday-party-brouhaha. Accessed 31 Aug. 2020.
- Rourke, Constance. *American Humor: A Study of the National Character*. Introduction by Greil Marcus. *New York Review Books*, 2004. 『アメリカ文学とユーモア—国民性の研究』原島善衛訳、北星堂書店、1961年、1982年。
- Scharnhorst, Gary. *The Life of Mark Twain: The Middle Years, 1871–1891*. U of Missouri P, 2019.
- Sedgwick, Ellery. *The Atlantic Monthly, 1857–1909: Yankee Humanism at High Tide and Ebb*. U of Massachusetts P, 1994.
- Slone, David E. E. *Mark Twain as a Literary Comedian*. Louisiana State UP, 1979.
- , editor. *Mark Twain’s Humor: Critical Essays*. Garland Publishing Inc., 1993.
- Smith, Henry Nash. “‘That Hideous Mistake of Poor Clemens’s.’” *Harvard Library Bulletin*. 9 (1955), pp. 145–180.
- Smith, Harriet Elinor. Introduction. *Autobiography of Mark Twain*, vol. 1. Edited by Harriet Elinor Smith, and other editors of the Mark Twain Project. U of California P, 2010, pp. 1–58.
- Twain, Mark. *Autobiography of Mark Twain*, 3 vols. Edited by Harriet Elinor Smith, and other editors of the Mark Twain Project. U of California P, 2010–2015.
- . *Chapters from My Autobiography*. 1906–1907. Edited by Shelley Fisher Fishkin. Oxford UP, 1996.
- . *Mark Twain’s Own Autobiography: The Chapters from the North American Review*. With an Introduction and Notes by Michael J. Kiskis. The Univ. of Wisconsin Press, 1990.
- . *Mark Twain to Mrs. Fairbanks*. Edited by Dixon Wecter. Huntington Library, 1949.
- . *My Autobiography: “Chapters” from the North American Review*. With an introduction by Thomas Wortham. Dover Publications, Inc., 1999.
- . *Mark Twain’s Speeches*. With an Introduction by William Dean Howells. Harper and Brothers Publishers, 1910.
- . *Speeches*. 1910. Edited by Shelley Fisher Fishkin. Oxford UP, 1996.

- . Speech at the Birthday Dinner of John Greenleaf Whittier, Boston, 1877 December 17, Autograph Manuscript of Speech, 1877 December 17, p. 1; Samuel Langhorne Clemens Collection, Series II, Box 14. YCAL MSS 852, Beinecke Rare Book & Manuscript Library, Yale University.
- Welsford, Enid. *The Fool*. Faber and faber, 1935. 『道化』内藤健二訳, 晶文社, 1979年初版, 1990年。
- Willeford, William. *The Fool and His Scepter: A Study in Clowns and Jesters and Their Audience*. Northwestern UP, 1969. 『道化と笏杖』高山宏訳, 晶文社, 1983年。
- Whittier, John Greenleaf, 1807-1892. Plan of table and signatures of guests at Atlantic dinner given for J.G.W. MS.s.; [Boston] 17 Dec 1877. Autograph file, W, Box: 188a. Houghton Library, Harvard University.
- 井川眞砂「〈書評〉マーク・トウェイン著, 里内克巳訳『【連載版】マーク・トウェイン自伝』(彩流社, 2020年)」, 『マーク・トウェイン研究と批評』第20号, 2021年6月, 68-71頁。
- 亀井俊介監修, 平石貴樹編『アメリカ文学史・文化史の展望』松柏社, 2000年。
- 亀井俊介『マーク・トウェインの世界』, 南雲堂, 1995年。
- 倉橋洋子・高尾直知・竹野富美子・城戸光世編著『繋がりの詩学—近代アメリカの知的独立と〈知のコミュニティ〉の形成』彩流社, 2019年。
- 佐久間みかよ「トウェインが読むエマソンの詩—ホイットア誕生70周年記念祝賀スピーチを巡って」, 『マーク・トウェイン研究と批評』第21号, 2022年, 27-33頁。
- バフチーン, ミハイル『フランソワ・ラブレーの作品と中世・ルネッサンスの民衆文化』川端香男里訳, せりか書房, 1973初版, 1997年。
- 広瀬典生『アメリカ旧南西部ユーモア文学の世界』英宝社, 2002年。
- 渡辺利雄「アメリカ文学の黎明—マーク・トウェインの評価をめぐる」『文学とアメリカⅢ』南雲堂, 1980年, 221-239頁。